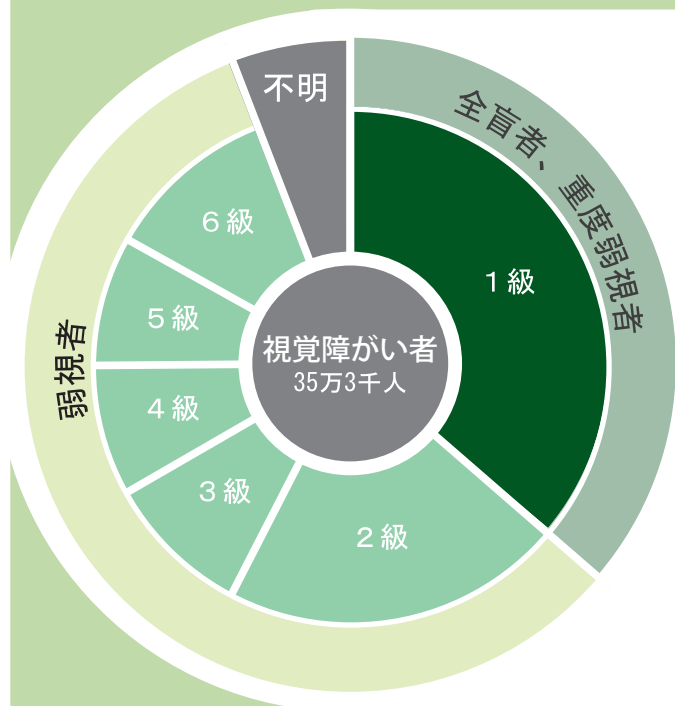


「視覚障がい者」とは？

視覚障がい者には全盲と弱視があります。

視覚障がい者の内訳



「視力を有しない視覚障がい者(全盲者)」と「視力を有する視覚障がい者(弱視者)」をあわせて「視覚障がい者」と呼びます。日本の視覚障がい者は約35万3千人で、障害の程度により6段階の級に分類されています。このうち約3分の1は視覚を使って生活することが困難な人(1級/全盲者・重度の弱視者)、約3分の2は視力や視野が障害され日常生活に支障をきたしている弱視者(2～6級)と言えます。

級	障害の程度
1級	両眼の視力の和が0.01以下
2級	両眼の視力の和が0.02以上0.04以下
3級	両眼の視力の和が0.05以上0.08以下
4級	1.両眼の視力の和が0.09以上0.12以下 2.両眼の視野がそれぞれ5度以内
5級	1.両眼の視力の和が0.13以上0.2以下 2.両眼の視野がそれぞれ10度以内 3.両眼による視野の2分の1以上が欠けている
6級	一眼の視力が0.02以下、他眼の視力が0.6以下で両眼の視力の和が0.2を超える

症状やその程度によって見え方が異なります。

晴眼者の見え方



視覚機能には、かたちを見る機能、明暗を認識する機能、色を見分ける機能、動きをとらえる機能などがあります。視力や視野が障害されるとこれらの機能が低下し、見え方が変化します。障害される視覚機能によって見え方は異なります。複数の視覚障害が重複して現れる場合もあります。

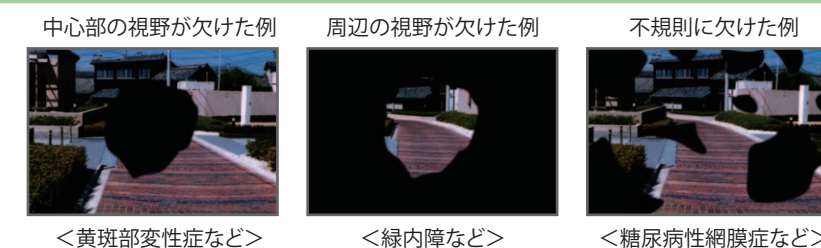
視覚障がい者の見え方※

ぼやけて見える例



強度の近視など

視野が欠けている例



中心部の視野が欠けた例

周辺の視野が欠けた例

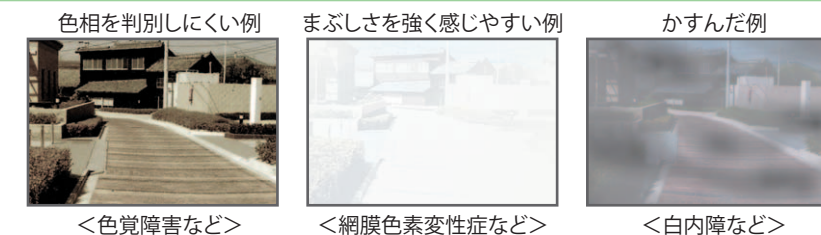
不規則に欠けた例

<黄斑部変性症など>

<緑内障など>

<糖尿病性網膜症など>

その他の例



色相を判別しにくい例

まぶしさを強く感じやすい例

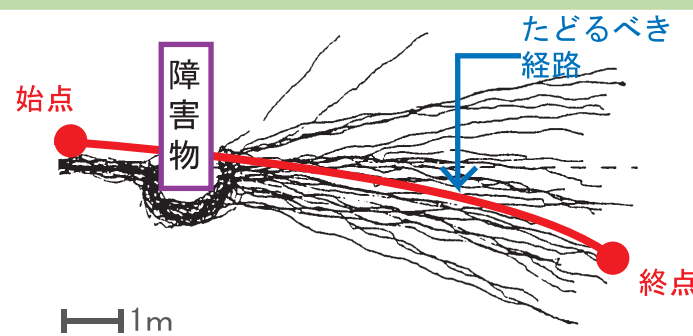
かすんだ例

<色覚障害など>

<網膜色素変性症など>

<白内障など>

障害物回避歩行実験の結果*



黒い線は、アイマスクを着用し始点から終点を目指して歩行した際の被験者の歩行経路を示したものです。途中で障害物を回避すると、進行方向が目指す方向から大きくズレ始めることがあります。視覚に障害を持っていると方向を見失いやすいことが分かります。

十分な情報を得られないため方向を見失うことがあります。

全盲者は主に触覚と聴覚で、弱視者はこれに加え残存する視覚によって行動に関わるすべての情報を得なくてはなりません。晴眼者に比べ十分な情報を得られないことも多く、自分の現在位置を認識できなくなったり、目指す方向が分からなくなったりすることがあります。危険箇所を見逃したりすることがしばしばあり、それが大きな事故につながる可能性もあります。

※これは、視覚障がい者の見え方を理解しやすいように作成したイメージ写真です。実際の見え方には個人差がありますので、一例とお考えください。
* 出典: I.Tanaka, O.Shimizu, M.Ohkura, T.Murakami and M.Tauchi, Direction judgment of blind travelers in straight walking after negotiation an obstacle. Nat. Rehab. Res. Bull. jpn.,10:145-148(1989)